

曇天の浜辺

どんより曇った深緑色の海を眼前に
砂にはまったタイヤがキュルキュル鳴って
泣きたいほどの情けなさから
泣きたいほどの気分を全く受け付けない海の平穏な姿から
突然あの兄貴がやって来た

おろおろと逡巡する俺のほうへ
事も無げに歩いてきたあの兄貴は
やっぱり余りに平穏すぎて
俺の縫りたい心を容赦なくはね返した
その時、俺は頑なな少年のように彼を憎んだ

俺は馬鹿みたいに唯おろおろしていた
その円の真ん中で彼は忙しく立ち働いた
そして到底車が砂から抜け出すことが出来たとき
俺はもうすっかり呆けたように、唯突っ立っていた
心の中では激しい憎しみが燃えていた

そんな俺には一向構わず
あの兄貴は勝手に手を振って行っちゃまった
すっかり俺をこけにして！
俺は憤怒をこめて叫んだ
「ありがとう」と

(1982.7.1)